

第3回・図書館講演会「著者と語る」

「本を読む人 読まない人」

安藤 元雄*



第3回図書館講演会「著者と語る」は、2000年6月14日（水）午後2時30分～午後4時に和泉図書館第2開架閲覧室で行われた講演の記録です。（編集部）

*あんどう・もとお／政治経済学部教授／詩人

ご紹介をいただきました安藤です、と申し上げるところなんですけれども、はっきりいうと大袈裟なご紹介で、ちょっと恐縮しております。

私、本当は、今年は特別研究に当たっておりまして、大学に来て授業をしなくてもよろしい、そのかわり自分の研究を十分しなさいという、そういう1年を過ごすはずだったのですが、こんなことに引っ張り出されて、きょうは出てまいりました。久しぶりに大学へ来ましたら、さっき研究室のほうへちよつと行ってみたんですが、私の来ない間にたまっている書類が大きなロッカーにいっぱいになっておりまして、これを片付けなければならないかと思ったらげんがりしてしまったという状態です。

きょうは、図書館主催の講演会ということで、伺いますと、第1回には、著名な劇作家の井上ひさしさんが来られて、この部屋がいっぱいになって立ち見も出たと聞いております。2回目は、本学の斎藤先生が漫画を材料にしていろいろお話をされ、このときもたくさんの聴衆が詰めかけたと聞いております。きょう、こうやって席をを見ますと、かなり空いておりますので、これは日頃私が授業をするときの教室の空き具合とだいたい似ておりまして、まあ私にはちょうどいいところなのかも知れません。

本を読むということは文字を知ると言うこと

きょうの演題は「本を読む人、読まない人」ということでお話をしようと思っております。といっても、これは私が、自分は本を読む人であると思って、読まない人である学生諸君に訓戒をたれるというような角度でお話をするわけでは全然ありません。私自身が、どちらかというと本を読まない人であります。私も、もう65歳を過ぎたのですが、これまでの人生で、私が読んだ本というのはわずかなものにすぎません。自分で、我ながらこんなことで文学者といえるのか、というような感想をときどき持ちます。そういう、いわば読まない人の立場からお話をしたいのですが、読まないといっても、多少は読んでおりますので、そのへんの出たり入ったりを諸君にお話すれば、いくらかは参考にしていただけるのではないかと思います。

もうさんざん言われていることですが、最近の若い人は本を読

まない」ということがしばしば語られます。特に年寄りの口から語られます。年寄りは、自分が若い頃、そんなに大いに本を読んだかという、実はそれほどでもなくて、ただなんとなく年をとって、亀の甲羅が厚くなっているものですから、それで若い連中を少しはちゃんと鍛えにやならんという気持ちが頭のどこかにあって、「おまえら、本を読まにゃだめだぞ」というようなことをよく言うわけです。しかし、とにかく最近特にそういうことがよく言われます。

なぜ若い人が本を読まないかという、若い人たちは、文字が嫌いである。文字が信用できないと思っている。若い人が本を読むとすれば、漫画を読むとよく言われます。実際に、本屋さんの店先に行ってみますと、ここは図書館ですから、こうやって開架式の書棚を見ても漫画の本はほとんど置いてありませんけれども、本屋さんへ行ってみると、店頭は漫画本で半分以上埋め尽くされておりまして、漫画じゃない本は、奥のほうにチョコチョコボとしかない。そういう本屋さんが多いですね。どうしてそんなになっっちゃったかという、やはり漫画じゃない本というのはあまり売れないから、本屋としてみれば、よく売れる回転のいい本を置いたほうが商売になりますから、どうしても漫画本をたくさん置いてしまうということになっているのだそうです。

オリジナルの漫画だけでなく、例えば『源氏物語』が漫画になる、あるいはマルクスの『資本論』が漫画になるというふうなこともあって、少し先へ行きますと、『資本論』というのは漫画シリーズの一つかと思ひ込むような人が、もしかすると出てくるかもしれない。

さらに最近、私自身が本屋の店頭で見つけてびっくりしたのですが、キリスト教の聖書が、大変漫画的な、今ごろの言葉でいうと「マンガチックな」と言うべきでしょうか、マンガチックな週刊誌調の文章で書き替えられたものが売られておりました。これをパラパラめくってみたら、本物の聖書を読むよりよっぽど分かりやすいわけです。なるほどこれだけ分かりやすければ、こっちのほうに読者が流れてしまうのも仕方がないかな、という気もしました。

そのような具合で、文字文化の時代が今や終わりつつあって、じゃ、新しい時代は何かといえば、それは「映像文化」の時代というのだそうです。

本当でしょうかね。私は本当じゃないと思うのですけどね。なぜならば、ということこれから少しお話しします。

確かに漫画は映像表現に多くを依存しております。例えば、漫画の中で、主人公が激しく感動したとか、激しく相手を怒鳴りつけるとか、そういうふうな場面になりますと、顔が1ページいっぱい描かれたりして、これは映画のクローズアップの技法と同じですが、そうやって主人公が激しく激昂しているような様子を表したりいたします。それから、よく言われる言葉に「百聞は一見にしかず」という言葉があって、ある事柄について、百回聞いてもなかなかそのものの実態が分からないが、一度この目で見ればすぐ分かる。で、「百聞は一見にしかず」。「しかず」というのは「及ばない」というぐらいの意味になりますか。つまり、百回聞くのは一度見るのに及ばないということですね。この「百聞は一見にしかず」という言葉がよく言われます。「百聞」の“ブン”というのは“聞く”ことですから、これは言葉を聞いているわけです。本は文字で書かれています、その文字のもとになっているのは言葉ですから、結局、言葉は映像に及ばないということ、この諺は言っているようにみえます。

しかし、本当にそうかということ、もういっぺん検討してみたいわけです。確かに、文字は読まなければ分かりません。映像は見ただけで分かります。確かに簡便です。本を読むということは、まず文字を知っていなければ読めませんから、これはすでに「教養」に属するわけです。

教養はオタク!?

諸君は、生まれたての子供のときは、もちろん文字なんか一字も知りませんが、少したつと、保育園ぐらいの年齢から、文字の稽古をさせられて、やがてその文字というのが、実は言葉を背負っているのであるということ、を学びます。言葉というのは、子供は文字を知る前からある程度知るわけです。親が話しかける言葉などを聞いて、だんだん自分も、それに無意識のうちに反応するようになって言葉を体得する。その言葉が、文字という記号で表されているのだということが分かってまいります。

私も孫を持つ年頃になりましたけれども、孫に「名前が書けるか?」と

言いましたら、「くあんどろ」って書ける」と言うんですね。「書いてごらん」と言いましたら、まずひらがなの「の」を書きました。これは「の」じゃないかと思って、さらに見ていたら、「の」から一本のつる草が伸び上がるように上へ線を引っ張りまして、ちょっと横に引いた。確かにこれで「あ」にはなるんですね。間違いではありません。出来上がった結果はそれでいいのですけれども、ただ、筆順が全く違う書き方をしておりました。

正しい筆順で、正しい字体を書くというのは、これはすでに教養に属することです。言葉というのも、実は、赤ん坊のときにお母さんの言葉を聞き分けるところから始まって、長い年月かかって積み重ねられた、やはり教養でありましょう。文字を知っていなければ本は読めないし、言葉を知っていなければ本が読めない。これらのものを知っているということはすでに教養なんです。

ところが、今ほど教養というものがおとしめられている時代はないわけです。これがおそらく多くの若い人たちを漫画に走らせているのだらうと思います。なにしろ大の大人が教養をバカにしてかかるわけです。大学では、教養課程というのが圧迫に圧迫を重ねられまして、例えば、外国語の時間が昔は週に3コマぐらいあったのが、2コマでいい、あるいは選択制でとらなくてもいい、というようなことにしてどんどん押し込められてしまう。

「教養」の反対語は何なのかといったら、「実用」なんだそうです。すぐ役に立つ。そういうものを大学で教えなさい。一般教養なんていうのはどうでもよろしいというのが、上は文部省から、下は個々末端の先生に至るまで、そして、その先生を通じて学生諸君に至るまで、教養を軽視して、実用を重んじるという風潮が、そこら中に行き渡っているなんていうものではない、はびこっておる。こんなことで、若い人たちに「本を読みなさい」と言っても、たぶん無理な話なのかもしれません。

しかし、実用的な教育というのは大変底の浅いものであります。すぐ役に立つということであれば、道を歩くことができ、お金を出して電車の切符を買うことができれば、どこへでも行かれます。けれども、そのお金ならお金が、どういう成り立ちで僕らのポケットの中に入っているのか、

というふうなことを深く突っ込んで考えることを誰もしません。そういうことで「俺は、きょうは金がねえや」なんて言ったりしている。本当は、なぜ自分にお金がないのかということをもっと突っ込んで考えなければいけないはずなのに、それを突っ込んで考えさせることをしない。しなくてよいということになっている。

君たちが、今これから本を読むということは、そういう風潮に逆らうこと、そういう風潮と戦うこと、そういう風潮にゲリラ戦をしかけることであります。「ゲリラ戦」という言葉を使いましたのは、正面切って戦っても太刀打ちできませんからゲリラでいこうというわけです。ゲリラでいく方法は簡単です。本をたくさん読めばいいんです。実際に本を読むのはめんどくさい。文字を、あるいは言葉を考えるのはめんどくさい。それぐらいなら映像でパッと見たほうが分かりやすくていいと考えがちですし、私だって、いくらかはそう思います。私も、古典の名作といわれている文学作品を全部読破しているわけでは決してありません。知らない作品もたくさんあります。そういうのが映画化されたりいたしますと、その映画を見ます。そうすると筋も大変よく分かるし、それも2時間ぐらいで手っとり早く分かりますから、これでその話は分かったことになってしまう。大変便利です。そうやって仮に映画なら映画、漫画なら漫画にのめり込んだとしましょう。面白ければ人間のめり込みますから、自然にのめり込んでいきますね。そうすると、実は、そこで「オタク」と呼ばれる現象が始まるんです。

私は古い人間ですから、昔の漫画しか知りませんが、例えば、手塚治虫の『鉄腕アトム』なんていうのを読む。そうすると、だんだん鉄腕アトムに関する知識が私の中にたまってきまして、あそこでアトムはああやった、こうやったとか、あのときアトムと戦った敵は、どこから来たどういう悪いやつであるというふうなこととか、そういうことがいっぱい私の中にたまってしまいます。そうするとたぶん私は「アトムオタク」なるものにきつとなるのでしょうか。でも、このオタク化現象というのは、形を変えた教養なんですよ。なぜ我々がオタク化するかといえば、そういうものを積み重ねたほうが、積み重ねないより楽しいからそうなっちゃうわけです。そうなると、オタク化というのも一つの教養現象になってしまうわけ

です。

ただ違いは、学校で先生から教えられる、あるいは強制される、そういう教養ではなくて、自分が好きではまり込んだ教養だということです。そうすると、違いは、自分で好きではまり込んだか否かというところだけに帰着します。つまり、「自発性」のあるなしということになります。「本を読まない、読んでいない」と若い人が年寄りから文句を言われる。その多くの原因は、本が読めないわけでもなく、読むのをバカバカしいと思っているわけでもなく、たぶんこの「自発性」の問題に帰着するのではないかというわけです。

そこで、ここにこのように本がありますけれども、これらの本を形づくっている「文字」とか「言葉」というのは、いったいどんなものなのか。そこを少し掘り下げて考えてみたいと思います。

「文字」や「言葉」の卓越性

まず、「文字」というのは、言葉を記録したものです。「言葉」は、基本的には音声ですし、あるシチュエーションの中で発せられるものにすぎません。あるシチュエーションの中で、本当は意味を持ち得る。例えば、ここに人を罵るときに使う「バカ野郎」という言葉があるといたします。この「バカ野郎」は、ふつうは相手を軽蔑し、バカにするときに使います。けれども、例えばお父さんが、何かちよつとした失敗をした息子の頭を軽く叩きながら、「バカだな、おまえは」というふうな言い方をするときには、これはむしろ愛情の表現ではないでしょうか。同じバカでも、必ずしも人を罵ることに限ったわけではありません。その言葉が発せられたシチュエーションがあって、それが言葉の意味を大きく決定しているわけです。

いずれにしても、言葉というのは、多種多様な現実からみれば、ある種の暗号みtainなコードですね。そういうコードを編纂することを「エンコード」と申しますから、言葉というのは“現実をあるシステムに沿ってエンコードしたものである”ということが言えます。何のためにエンコードするかといえば、それによって他人との間にコミュニケーションをとるためです。そうやって現実をエンコードした言葉があって、その言葉をも

う一つエンコードしたものとして「文字」があります。我々はこの文字をデコードして言葉に還元します。さらにその言葉をもう一度デコードして現実に還元します。そうやってコミュニケーションをとっていくわけですね。

「エンコード」や「デコード」というのは、コンピュータをなさる方ならたいていよくご存じのことのはずです。ところが、コンピュータのほうだと、エンコードやデコードをせっせとやるくせに、言葉や文字については、エンコードやデコードをめんどくさがるというのは、ちょっと私には納得がいかない。むしろ言葉のエンコード、文字のエンコード、そのデコードということに、もっと関心、興味をお持ち願えないだろうか。そして、そこに自発性を発揮していただけないだろうかと思っております。

ついでながら、言葉や文字はコードでありますから、ある現実を二重にエンコードして文字にする。そして、その文字を二重にデコードして現実に還元するというときに、完全に元に戻るわけではありません。なにしろコードですから、取り落とすこともあれば余計なものが付け加わることもあって、二重にエンコードしたものを、二重にデコードして100%同じところに戻ってくればいいのですが、そうはいきません。つまり、ズレが起きます。このズレがまた面白いんです。このズレがあることを許容し得るのです。ズレがあるから不正確だというわけにはいきません。このズレがあるから、駄洒落なんていうものが可能になります。同じ音なのに全く違った現実を意味するということですね。こういうズレを私たちは承知の上で言葉や文字を楽しみます。

例えば、ドストエフスキーに『罪と罰』という小説があります。これはある青年の思い上がった考え方から、金貸しのお婆さんを殺してしまうという話です。こんなことは今の我々の周辺にもしゅつちゅう起きている殺人事件かもしれません。しかし、あの小説に書かれているのは、19世紀のまだ革命前の帝政ロシアのペテルスブルグという町の出来事です。ところが、この『罪と罰』という小説をもし読む人がいるとすると、読んでその人が受ける感動というのは、必ずしも19世紀帝政ロシアのある大都会を復元して楽しむというわけではありません。むしろ、もうちょっと自分の身に近いところに引きつけてきてしまう。これも実は微妙なズレでありま

す。そうやって我々は、その青年、ラスコーリニコフといますが、この青年に共感したり、おじ気をふるったり、いろいろな感想を持つわけです。

文字は、このような二重のエンコードの産物でありますから、中には文字を使わない民族もいるんですね。言葉はあります。文字を持たない民族というのはあります。言葉を持たない民族というのはありません。言葉があれば、必ずその民族の集団的な記憶のようなものが言葉として残ります。残りますが、文字がありませんから記録されません。

人類学者に川田順造さんという方がおられます。私と同世代の人ですけれども、この方が、アフリカへ行って、アフリカで文字のない、文字を使わない民族の中に入って生活を共にしながら、彼らの使う言葉を録音したり、彼らが歌ったり踊ったりする状況を録音したりして、いろいろ貴重な研究をなさっておりますが、この川田さんに言わせると、ある種族は、儀式のときに太鼓を叩くのだそうです。太鼓係というのがいまして、それが儀式が始まるとトントコトントコ叩く。ところが、この太鼓には実は意味があって、トントコトントコをずっとやっていくうちに、その種族の過去の歴史がずっと語られるらしいんです。太鼓の音で。その太鼓の音を毎回聞いて聞き慣れている。何しろ儀式のたびにやりますから、同じことを繰り返すわけですから、少し慣れてくると分かる。日本の歴史でいうと、あつ今、平安朝の時代を叩いているとか、今は関が原の合戦を叩いているとか、太鼓の音だけでそういうふうなことが分かるのだそうです。そうすると、この太鼓の音というのも、一種の言葉になっているわけであります。私は、ここのところを川田さんの書かれた『声』という、大変面白い本ですが、そこでその話を讀んだときには、ちょっと背筋がシャンとするような思いがいたしました。なるほどそういうこともあるのかと思いました。

おそらく、その太鼓係の頭の中には、彼らの属する種族の歴史が全部入っていて、それが太鼓の音にエンコードされて叩かれ、その太鼓の音を聞いた同じ種族の人たちは、それをまた適宜デコードして、自分の種族の歴史を確認し合っているのでしょう。

それに比べますと、我々が「文字」と「言葉」というものでいろいろな記録を残して、それをまたいろいろな人たちに伝え得るといえるのは、ず

いぶん便利なことです。つまり、言葉というのは大変便利なものなんですよ。いろんなことができます。ですから、その言葉をさらにエンコードした文字というものを、いかに人々に覚えてもらうかというのが、それぞれの社会での大きな問題になります。我々はこれを「識字率」、つまり、字が読める人の率といいまして、100人中、日本だとおそらく100%でしょうが、外国へ行きますと、俗に先進国と呼ばれているところでも、字が読めないという人が必ず何人かはいるものだそうで、なかなか100には届かないそうです。ましてや、今のアフリカのそういう種族は識字率ゼロですよ。そういう人たちだっているわけです。べつに識字率が低い人たちは遅れている、高い人たちは進んでいる、というふうに一概には言えませんけれども、ただ、文字を知っていれば便利であることは確かです。それはちょうど携帯電話を持ってないよりは持っているほうが便利だということと同じことです。

言葉や文字は、このように現実から見た場合に、コードとして使うわけですが、いま申し上げたように、非常にすぐれたコードでありまして、言葉や文字の卓越性というのは、ほかのコードの仕方にならば大変便利なものです。

考えてみれば、我々が今大いに活用しているコンピュータだって、あの画面に文字が出てくるから、我々はそれを操作できるわけでありまして、文字がなかったらコンピュータそのものができたかどうか分からない。それから言葉、音声言語だけだと、言い違い、聞き違いということが十分起こり得ますが、これをもういっぺん文字にエンコードし、文字からデコードするという経過をたどりますと、そのような言い違いや聞き違いも解消されます。これもよくできたものですね。

言葉は画像より想像力を高める

いかに言葉がすぐれているかという一例を申しますと、三島由紀夫という小説家がありますが、この人が『文章読本』という本を書きまして、この中に、ある人が私に質問をしたと書いてあるんです。「自分はいま小説を書いているのだが、その中に世界一の美女を登場させたいのだ。そういう

世界一美しい女性というのをどのように描写したらよろしいでしょうか」という質問をした人がいるそうです。三島由紀夫はそれに答えて「それは大変簡単である。君の小説の中に<彼女は世界一の美女であった>と書けばそれでいいのだ」と言うんですね。つまり、顔がどうの、眉がどうの、鼻がどうの、そんなことをごちゃごちゃいくら描写したって、世界一の美女なんていうのは描けるものではない。言葉で「世界一の美女」と規定すればそれでいい。言葉にはそういう力があるんです。これも大変便利なことです。

一方、映像は、生にものの形を見せてくれますから、大変わかりやすくていいのですが、しばしば、筆者の言いたいことの隅々までが享受者に伝わるかという、必ずしもそうではありません。そのいちばんいい例の一つだけ申しますが、印象派という絵描きさんたちがいますよね。あの中でモネという人がよくこんな絵をかいています。田園の草草原、花が咲いていたりする美しい場所に、きれいな服を着た女性が立っていて、日傘か何かをさしている。そういう絵をいっぱいかいております。我々はこれを、フランスの田園風景だろうと思って見るわけですね。ところが、上野に国立西洋美術館というのがありまして、あれの館長さんをしている高階秀爾さん、この方は美術史のほうでは偉い先生ですが、私からみても先輩にあたる方ですが、この方に伺ったところでは、あそこに立っている女は、パリの人、都会人なんだと。都会人が都会の服装をして郊外に遊びに出た、そういう場面なんだ。田舎の女じゃないんだと言われまして、私もその話を聞いたときは目を開かれたような思いがいたしました。19世紀の後半になりますと、フランスでも鉄道が急速に発達する。鉄道以外の乗り物も発達します。一方、都会には暇を持て余すいわゆるブルジョアができてきまして、こういう人たちが、週末になると郊外へ遊びに行くわけですね。そこで都会の服装をした女性が、日傘をさして田園風景の中に立っている、というふうな図柄が完成するわけです。

同じ印象派でも、例えばゴーギャンは、ブルターニュのポンタベンというところに立てこもってポンタベン派という一派を形成して盛んに絵をかきますが、このゴーギャンがかくのは、ブルターニュの田舎女たちです。つまり、ブルターニュの服装をして、顔も浅黒く日に焼けたりして、

そして何か田舎の仕種をしております。例えば農作業とかそういうものです。あるいは田舎のお祭りだとか、そういうことをしている。都会人ではありません。

モネの描いた日傘をさした女性が、実はパリ女、パリジェンヌなんだ、都会人なんだというのを聞いたときに、なるほどそういう情報は、実はその絵の中にちゃんと入っていたはずなんだけれども、私はそれに気がつかなかったなあということを、いまさらのように悟りました。だから、映像はストレートに何でも分かるというけど、必ずしもそうではないんですね。説明してもらわないと分からないところもたくさんあるわけです。

諸君は、『泥の河』という映画をご覧になったことがあるでしょうか。いい映画ですね。あれをつくった監督、小栗康平という人ですが、私はついこの間、さっきご紹介の中にありました前橋の文学館での展覧会の初日にイベントとして対談をやれといわれて、こういうふう到大勢お客さんがいる前で、ここに小栗さんが座って、こっちに私が座って、対談をしました。なぜ小栗さんが対談相手に選ばれたかというと、これは前橋の文学館のほうで選んだのですが、あの方は群馬県の出身なんだそうです。そういうわけで、私は一時間ほど小栗さんと対談をいたしました。

私はその中で、『泥の河』という映画の話を思い出しながら、あれは泥水だらけの河の上に舟が一隻浮かんでいて、岸に舫^はつてあります。これは廓舟と呼ばれていて、つまり売春宿なんです。この廓舟の中で、女の人が売春行為をやっている。この女の人には子供がいて、その子供が町の子と知り合ってどうこうという、ちょっと悲しい映画ですけれども、この廓舟が映像としてすごいんですね。河のほとりに舫^はつてある舢^{はしけ}のようなもので、板が2枚渡してありまして、一方の板を岸から渡って行くと、その子供たちが生活している舟の前半部の生活空間の中に入る。もう一方の板を渡って行きますと、舟の後半部のところ、つまりその子供たちのお母さんである女性が売春をやっている宿のほうに通じる。だから板が2枚岸から渡っているわけです。

初め私は、映画で画像を見ているときは、何で渡り板が2枚渡してあるのか全然わかりませんでした。やがてなるほどそういうふうに使分けるとのことだというのが、映画が進行していくにつれて分かりました。ああい

う廓舟というのは本当にあったんでしょうか。映像ではああいう舟の形、2枚の板の渡し具合。何しろ生活部と売春部ですから、ちょっと離れたところへ入るようになってるんですね。そういうのもうまくつくってありました。「当時のデータか何かをお調べになって、ああいう舟をつくったのか。それとも監督の想像上の産物なんですか」と聞きましたら、彼は口を濁してはつきり答えてくれませんでしたけれども、あれには宮本輝という作家の原作があって、「原作には<廓舟>としか書いてないものだから困りましたよ」というようなことを小栗さんはおっしゃっておられました。

これなんかも、映像で見ていると、そういう舟があったんだろうということを文句なしに納得してしまいますが、もしも小説で「廓舟」というような言葉、これは普通の人にはちょっと耳慣れない言葉だと思いますので、何だろうこれは、と思うはずです。そういう初めて読者が受け止めるような言葉を小説の中でうまく使いながら、だんだん分からせていくというのが、著者である宮本輝の腕のみせどころなのかもしれませんが、初めは全然関係ないところで、会話の中などにチラッと出てくるんですね。「廓舟の子と付き合うんじゃないぞ」みたいな話から始まる。何だろうと思ってその場は読み過ぎしてしまうと、少したつとだんだんそういう舟が出てくるというふうになっております。

これが、映画でなしに小説だけで読むとすると、むしろ分かりやすいかもしれません。映像にするのは大変な作業ですが、それを言葉で読んでしまったほうが、一見わかりにくい言葉であっても、スーッと読者の胸に入ってくる可能性があります。こういうところも言葉や文字のコードとしての卓越性であろうと私は思います。この卓越性を支えているのは、そのコードをエンコードし、デコードするとき生ずるズレ、そのズレをうまく操ることによって発揮される読者一人一人の想像力といったものではないでしょうか。

本を読むということは、映像を見ることとは大違いで、このような一人一人の想像力が刺激され、訓練されて、大変なパワーを秘めるに至る。そういう効果をもたらすものであります。映像で見ている限り、このような効果はほとんど期待できません。言葉を経由することによって、そのような想像力の増大と、それによる効果が大きい期待できるわけです。いま

申し上げたエンコードやデコードによって、一見めんどくさいようでありながら、かえって効果的にいろいろなことがコミュニケーションできるわけです。

文字情報の遮断が生み出す恐怖

このように、書き手と読み手が適宜コミュニケーションしてしまうということは、ちょうど今、インターネットなるものが政治権力者から大変危険視されているのと同じでありまして、民衆がかつてに互いに連絡をとっちゃうというのは困るんですね。権力者というのは全ての情報が自分のところへ来て、そしてまた自分が発表したものだけがみんなによって受け止められるという状態がいちばん嬉しいわけであります。それが権力でありますから、向こうのほうでかつてにコソコソやっちゃうというのは非常に危険なことであります。もしかすると、そのコソコソがだんだん広まって、革命とか暴動とか、そういうものになっちゃうかもしれない。ですから、今インターネットはかなり危険視されておりますけれども、昔から権力者は、書物というものを大変危険視しました。本は危険視された歴史があります。これは活字なんかの発明されるよりずっと前からです。今から2000年以上前の秦の始皇帝は、焚書坑儒ということを行って本を焼きました。同じことを2000年後のナチスもやりました。このくらいに、本だとか文字というものは権力者からみると怖いものであります。どこでどうコミュニケーションしてしまうか分からない。

従って、権力を今のところ持っていない君たち、しかし、何とか権力に少しでも逆らって意地をみせてやりたい君たちとすれば、「言葉」や「文字」の仕組みを自分のものにするということは、大変な力になりますよ。

このように、始皇帝だのヒットラーだのは、本を焼くことによって、情報を権力者の手で管理しようとしたましたが、それができなかったことは歴史の教えるとおりです。

日本でも戦時中、というのもう50年以上も昔のことになりましたけれども、情報統制が強く行われました。私はいつだったか、1945年5月のフランスの新聞、今から50年以上前のフランスのル・モンドという代表

的な新聞がありますが、そのル・モンドに、日本の動きを報じている記事が出ているのを見つけまして、それを読みました。

どんなことが書いてあったかという、1945年5月という時点を思い出してください。45年というのは昭和20年ですね。昭和20年の4月にはベルリンが陥落して、ヒットラーのナチス政権は崩壊しました。ヒットラー本人も自殺したということになっております。日本と同盟を結んでいた枢軸国、日独伊三国のうちで、イタリアはとくに脱落してしまって、残っていたのはドイツと日本だけだったんですが、そのドイツが1945年4月にポシャるわけですね、陥落します。日本だけ残ります。さあ一人だけ残っちゃった日本はどうするか、というのが5月の時点です。

この5月に、日本はひそかに、それも表向きの外交ルートではなくて何やら裏ルートを使って、何とか和平への道はないかというさぐりを入れ始めます。5月の時点ですよ。ル・モンドの記事は「まだ日本は十分本気だとはいえない」というふうに書いているのですが、そしてこんなことを書いている。これはちょっと恐ろしいことなんですが、「日本は今、総力戦だとか何とかいって遮二無二沖縄にしがみついている」と書いてあります。ちょうど沖縄戦が激しかった頃ですね。日本はこの沖縄戦、こんな激しい消耗戦で、何を連合国側に伝えようとしているのかといえ、日本を屈伏させるためには、まだまだ連合国側も多数の戦死者を出さなければ駄目だぞ、おまえのほうもこれから先、まだかなり死人が出るものと覚悟しろ、ということを伝えているのだ、と書いています。

私は、それを読んだときに大変恐ろしいと思いました。なぜならば、この論理は、原爆投下を容認する論理だからです。つまり、まともな原爆を使わない戦争をしていたのでは、日本側が100人死ぬと、アメリカ側も50人ぐらい死ぬかもしれない。そういう消耗戦をズーと、かなり長い間続けていかなければいけない。手っとり早く決着をつけるには、日本側を一発で参らせるような武器が必要だ。だから、広島や長崎の原爆投下は正しかったのだ、という意見が今でもアメリカの中にありますし、ヨーロッパの一部にもきつとあると思います。それは、日本がそういう消耗戦を仕掛けたからであります。

実際に、昭和20年5月にひそかに始められた和平交渉は長引きまして、

なかなか大方の同意が得られずに夏まで引っ張られる。ついに原爆が2発落っこって、それでやっと日本は屈伏したという形に、歴史的にはなっております。

私が怖いと思ったのは、そのような原爆投下を正当化する理論が、既に昭和20年5月の時点で欧米のほうに兆し始めているということ、ル・モンドの文章から読み取ることができたことであります。同時に、昭和20年の5月に、もうこういう動きを始めているのだったら、当時、日本の国民は何を知らされていたのか。何も知らない。相変わらずアメリカがもし攻めてきたら、海岸で上陸してくる敵を竹槍で刺して一人一殺で、一殺というのは一人を殺すということですね。こっちも死ぬでしょうが相手も死ぬ。それを繰り返して、日本国民が全部死ぬまでそれを繰り返すのだというようなことを本気で信じていたんですよ。

これは当時、私がその時代にいたから言えるんです。本気でそうでした。私はまだ子供でしたけれども、小学校の5年か6年生です。昭和20年に6年ですね。昭和19年に5年生です。小学校の5年か6年でしたけれども、もちろん男子は全部、銃剣術のような武闘訓練を、学校でずいぶんやらされました。それから、集団疎開というのに行ったんですが、疎開先でも、川原で石を投げる稽古をさせられました。川原にこのぐらゐの石がゴロゴロありますので、それを拾って、こう投げろと。子供ですからそんなに遠くまで届きませんが、とにかく投げろと。投げる前に、こうやって自分のかかとにコツンと当ててから投げろと。なぜかかかとにコツンと当てると思いませんか。これ実は手投げ弾、手榴弾なんですね。手榴弾をここでこうやって発火装置に点火してこう投げる。そういう稽古を小学校の5年生や6年生に、小学校の先生がやらせていた。そういう時代ですから、日本は負けるしかない。ということとか、そのためには何とか和平交渉をなんていう動きがどこかで始まっているなんていうことは、何も知らされていなかった。

ところが、これが載った記事はフランスのル・モンドという新聞で、ル・モンドという新聞は、日本でいえば朝日新聞みたいに、誰もが読める新聞です。フランス人は誰でも読むことができた。つまり、フランス人なら誰でも知ってることを、我々は何も知らないでいた。これはたまたま私がフ

ランス語を専門にしていたので、ル・モンドを読んだから知ったんですが、おそらくドイツの新聞にも出たかもしれず、イギリスやアメリカの新聞にも出たかもしれない。情報がそのくらい我々には当時遮断されていたということです。

情報を遮断するというのが、権力者たちの国民の意識を操作するほとんど唯一の有効な手段なんです。同じことをついこの間、オウム真理教という小さな集団、これは日本の国家全体に比べればはるかに小さな集団ですが、そこでもやりました。オウム真理教は、信者たちに、我々を除いたこの世の中全体が我々に敵意を持っていて、いつ我々に襲ってくるか分からないという、強烈な被害妄想みたいなものを植えつけて、そのためには我々以外のやつらを殺してもいいのだというふうな教えを植えつけて、俗に「マインドコントロール」といっていますが、その「マインドコントロール」の実態は、情報の遮断と被害妄想、この2本に尽きます。情報を与えずにおいて、被害妄想に陥れば、たいていの人間はサリンぐらい撒くでしょう。そういうものなんです。

戦後の国語教育

この戦争が昭和20年の夏に終わって、私も小学校6年生で東京に戻ってきて、翌年、21年に中学に入りました。ここで面白いことが起こりました。

とにかくそれまでの神国、「神の国日本」という教えが完全に崩壊して、民主主義の時代になった。なったはなったけれども、民主主義の情報がさっぱり入ってこないものですから、学校の先生、何を教えていいかわからないわけです。とりわけ困ったのが国語の先生です。国語というのは、それまで国粋主義的な文献を読ませることばかりやっていたんです。国語の授業というのは、極めて国粋主義的な、伊勢神宮はありがたい神社だとか、天皇はありがたい神様だとか、そういうことばかりが書いてある文献を読ませていたわけです。それが読ませちゃいけなくなって、読ませるものがない。教科書はまだ終戦から1年たってないときですから、印刷もされません。やっとなっても、新聞紙みたいな大きな紙に印刷してありま

して、それを指示どおりにこう折って、こう折って、というふうにだんだん折って行って、綴じると何とか本の体裁にだけはなる。それもところどころ、何行目から何行目までは墨で消せなんていわれて墨で消す。そういうものしか教科書がない時代でした。そういうときですから、国語の先生が一番困っちゃったんですね。生徒たちに何を読ませ、何をどう受けとめさせたらいいか、言葉として分からない。

そこで、僕の入った中学の国語の先生は「君たちに本を読み聞かせてやる」と言って、授業時間に僕らを椅子に座らせたまま、先生が教壇で自分の持っている本を読んでもくれました。もちろん中学1年生ですから、まだ内容的にそんな難しいものは読めませんので、例えば宮沢賢治の童話だとか、あるいは森鷗外の『山椒大夫』だとか、芥川龍之介もあったかな。そういう幾つかの、1時間で読むのですから短編ですね、そういうものを読んだ。そのクラスの生徒だった僕は、期せずして名作朗読会を毎週毎週聞いたわけです。本は手元にありません。何もあります。すでに読んだ作品もあれば、初めて聞く作品もあるんです。

その先生は淡々と読んでくれました。べつにそこに解釈を加えたり、ここはいいところだから諸君覚えておけ、などというような余計なことは一切言わない。すぐれた作品を淡々と読み聞かせるだけです。ごくたまに、難しい言葉が出ますと、「これはこういう意味だ」と軽く語釈を入れてくれますが。それからまた、うんといいいところは「ここはいいですね」なんていうことをちょっと言いますけれども、それ以外のことは何も言わない。これで、僕は今でも、自分は最高の国語教育を受けたと思っています。

今のように、テキストにいっぱい横線を引いて、「それ」と書いてある「<それ>とは何を指すか次の4項目の中から答えよ」なんていう問題ばかり出すという、そういうバカバカしい国語教育はやってないです。それをやるとみんな国語嫌いになるんですよ。そうではなくて、いい作品を淡々と読んで聞かせて、「いいでしょう」なんて言うてくれただけのほうが、はるかに子供心にもいいなと思いますし、いまに自分もその作品を文字で読んでみたいと思うようになります。

現に、森鷗外の『山椒大夫』なんかは、その教室で聞いてすぐ古本屋で、当時新刊書はほとんど出てない。終戦直後ですから、本というのは古

本屋で買うしかない。その古本屋で岩波文庫の小さな『山椒大夫』を1つ買って手に入れました。

こういう最高の国語教育が施された理由は何だったろうかと考えますと、理由は一つしかありませんね。指導方針が崩壊していたからです。つまり、指導方針なんていうのはないほうがいいわけです。言葉というのは、本来アナーキストの武器であります。上からの方針なんかに従わずに、言葉それ自体の面白さによって、語り手から聞き手へ、書き手から読み手へ伝わっていけばそれでいいわけです。

弾圧下で本がもたらしたもの

このような圧迫の時代、弾圧の時代には、かえって人はたくさん本を読みます。不思議なことです。私は後に『堀口大学全集』……、堀口大学さんってご存じですよ。著名な詩人で翻訳家でもあります。この人の全集を編集することになって、面白いことを知りました。

この人が、昭和20年の11月、20年は8月が敗戦ですから、それからわずか3か月後、11月30日付けで生活社という出版社から『山巔の気』（サンテンノキ）という詩集を出しました。「山巔の気」というのは、“山のてっぺんを吹いている涼しい風”というくらいの意味でしょう。これだけでも、いやだった戦争がやっと終わって、サーッと涼しい風が吹きつけてくる。そういう喜びを表している題名ですが、何しろ敗戦の直後ですからろくな紙もない。ボロボロの黒いきたない紙に刷ってあって、ページ数もわずか32ページ、こんな薄っぺらなものです。こういう詩集を出しました。

私が『堀口大学全集』を編集しているときに、この詩集の現物を見てびっくりしました。奥付に「発行部数5万部」と書いてある。5万部、詩集がですよ。僕は自分でも詩を書くから、詩集が今どきいかに売れないかというのは分かります。君たち、詩人が詩集を出すとのくらい売れると思いますか。まず1000部は出ないです。たいていの詩の出版社は、500と1000の間、いいとこ700～800くらいしか作りません。それ以上作って売れないからです。僕の場合、この間の本は賞をいただいたりしたせい

もあって少しく売れましたが、それでも1000部です。そんなものです。そんな中で暮らしておりますので、5万というときはびっくりしました。これは何かの誤植じゃないかと思いました。当時は、本の奥付にちゃんと部数を書いたんですね。それで5万部と書いてある。

ところが、これはどうやら本当らしいということが、調べてみてわかりました。終戦直後のある時期、本が争って求められた時代があったんです。ほんの短期間ですけど。本と名のつくものならどんなものでもいいから読みたい。当時の出版業者は、「紙を黒くする」と言っておりました。つまり、紙に印刷インクをつけて黒くすれば売れるんだと。そのくらいに本が求められた時代が、戦後わずかな期間ですけどあったんですね。ですから雨後の竹の子のように小さな出版社が、ちょうど今でいうベンチャービジネスみたいに現れまして、そしてすぐつぶれていきました。生活社というのも、おそらくその一つだったろうと思います。今日まで残っておりませんから。堀口大学さんも、5万部詩集は出たものの、ちゃんと印税をもらえたかどうかは分かりません。本屋がすぐつぶれてしまえば印税なんてもらえないでしょうから。

これは堀口大学一人でなくて、当時の、つまり戦争を生き延びた詩人や小説家の本というのが、終戦直後はとてもよく売れたんです。批評家の評論もそうでした。そういうわけで、少し著名な詩人ならば、詩集が5万部出たというのも、あながちなことではなさそうだがということが、当時の時代層、出版事情などを少し調べてみて分かったんです。

もう一つ。フランスにヴィシー政権という政権が成立していた時期があります。1939年から45年まで。つまりナチスドイツがフランスを占領したときに、そのドイツの言うことをきく対独協力的な政権がフランスにできました。それまでの政権は倒れました。政権の名ヴィシーというのは、フランスの、パリよりずっと南の保養地ですが、そこに本部を置きましたのでヴィシー政権というんですね。このヴィシー政権の時代が3~4年続くわけですが、この時代にこんな記録が残っております。「パリでは図書館が満員だった」と。なぜかというと、図書館だけは暖房がきいていたからなんです。これはパリの冬の寒さをご存じの方ならお分かりだと思いますが、パリの冬に暖房なしで暮らすというのはとてもできたもので

はありません。札幌よりも緯度は北ですから寒いですよ。そういうところで、図書館だけは暖房がきかせてある。これはナチスにすればへまをしたものだと思いますね。そんなところに暖房をきかせなければよかったんです。許可しなければいいんですから。図書館は暖かいというので、人々は図書館に押しかけて殺到して、そこで本を読む。

さらに、パリの冬、緯度が北ですから夜は長い。夜が長いので本屋での本の売れ行きも上々だったと書いてあります。これはアンリ・ミシュールという人の『ヴィシー政権』という本に書いてあります。私も、ヴィシー政権の時代のことを調べていて、まさか当時の読書事情にぶつかるとは思いませんでしたけれども、面白かったので、その部分を抜き書きしてとってありました。それがいま申し上げたことです。

ヴィシー政権の時代、フランス本国は、北半分がナチスの完全な支配下に入ります。占領下に入ります。パリは北ですから、パリもそうです。そして南半分、南仏の方面が、このヴィシー政権の支配下に入りますが、ヴィシー政権は対独協力的ですから、ドイツが右と言え右、左と言え左。ユダヤ人を差し出せと言え、ハイハイって捕まえて渡しちゃうというふうなことをやっていた。

ヴィシー政権のもとにある南仏でもそうですから、ましてドイツ軍の直接統治のもとにある北のほうのフランス人たちの被っている圧迫感はさぞかしだったろうと思います。そういう人たちが、図書館に殺到して本を読んだり、あるいははなけなしの金をはたいて本屋で本を買ったりして夜中に読む。これはもうこれだけで立派な抵抗運動ですよ。

ジャック・プレヴェールという、詩人であり、映画の脚本家である人がいますね。この人が書いた有名な『天井桟敷の人々』だとか、『悪魔が夜来る』だとか、フランス映画の名作中の名作ですが、こういう映画は全部ドイツによる占領中につくられています。ドイツ人から見て、これがフランス人の抵抗を意味するということは分からないように作っている。それを見たフランス人だけが“そうだそうだ、ドイツ人はけしからん”と思うようにできている。今日これを見ると面白い映画です。一見何気ないおとぎ話のようにみえる『悪魔が夜来る』なども、その奥には、上から圧迫してくるものと、それを跳ねのけて自由を求めようとするものとの対立が鮮

明に描かれております。

プレヴェールという人は詩人ですから、詩もたくさん書いてるんです。戦前からずっと詩も書いている人なんですが、面白いことには、戦後まで詩集というものを出さなかった。ところが戦後、45年以降、プレヴェールの詩の評判があまりにもすごいので、出版社が、それを詩集にまとめてみたところ、あっという間に数十万部の売れ行きです。大変なものです。『パロール』(parole: ことば)という詩集でした。今読んででもなかなかいい詩集ですけど、なぜ評判がすごいということが伝わったかといいますと、それまでは詩集としては伝わっておりませんけれども、雑誌なんかにはときどき出していた。そういう雑誌なんかに出た詩を誰かがノートブックに書き写して、それを大学生くらいの青年たちが回し読みをしていた。一種のアングラ本ですね。そうやって若い者ならみんなプレヴェールの詩を暗誦できたといわれるくらいに普及していきます。これもすごいですね。若い人がゲリラをやるならこれぐらいのことをやってほしい。

こういうことで、大人の文化とは違う文化を、将来大人の文化にとって代わり得る文化を、自分たちが持ったということになります。しかし、これも、そのような圧迫の時代、社会が平穏無事ではない時代だからこそ可能だったことかもしれません。

「本を読むこと」は将来の可能性を広げる

このように、「読む」ということは、単に文字を読み、言葉を読むだけではなくて、その状況次第によっていろいろな価値を持ち得ます。もし君たちが、今ここで、これまでに読んだことのない本を一冊読むとしますと、その本の中には、当然ある程度の知識が書いてありますから、それを読んだ人は、その分だけ知識が増えるでしょう。しかし、知識を増やすのが本当の目的ではない。知識を増やすということは、単に君たち一人一人が脳ミソの中に持っている若干のデータベースをもうちょっと増大させるだけのことにすぎません。そうではなくて、言葉と現実との間の変換機能。さっき申し上げたエンコードとデコード、この機能を訓練し、研ぎ澄ますことになるのです。だから、本としてはバカバカしい本、くだらない

本、つまらない本でも、エンコード、デコードの機能を研ぎ澄ますためになら、ぜひ読んでほしいと思います。

だいたい「本」というのはそうでしょう。先生が「おい、そんなくだらない本は読んじやいかん」と言えば、読みたくなるものですね。禁じられたからこそ読みたくなる。これも人間、アダムとイブの昔からそうで、「その果物は食っちゃいかん」と言われたから食っちゃった。そこが人間の原罪の始まりなんだそうですけれども、それと同じようなことです。逆に、「この本を読め」と指図がましく言われると、なんだか読んでみる気がしなくなる。自分で発見する喜びがないからですね。近頃は学校での「読書指導」なるものが行き渡っているせいか、教師に「何を読んだらいいか」とたずねてくる学生が多いのですが、私は「図書館や本屋へ行って自分でさがしなさい」と答えることにしています。本をさがすことも勉強のうちなんですよ。

その意味からいうと、“まだ読んでいない本”というのは、“もう読んじやった本”に比べると、はるかに大きな可能性を秘めておりますから、まだ読んでいない本がいっぱいあるということは、あまり本を読まない人にとっては希望であります。「あらゆる本を読んでしまった」という言葉、これはフランスの詩人のマラルメの言葉ですが、大変大きな絶望を表している言葉なんです。もう読むべき本が一冊もない。それに比べると、「まだ読まなければならない本がたくさんある」と言われると、あせりを感じます。しかし、そのあせりこそが希望になるのではないのでしょうか。その意味では、まだ本を読まない、読んでいない人たちのほうに、将来の可能性がたくさんあることになります。

同じ本を繰り返し読む効用

「本を読む人」と「読まない人」の差はどこにあるのかといえば、人間としては、頭が1個、手足が2本ずつ、同じことですね。体の形は変わらない。見た目も変わりません。ただ、その頭の中に広がっているかもしれない闇の深さ、こいつが違うんですよ。それが本当の「教養」というものだ、私は思います。あるいは背後に広がっているものといってもいい。

背後に広がるアウラ (aura) の差だといってもいいかもしれません。それは、つまり可能性の差でもあります。それを「教養」と呼べばいいわけです。教養なんか何の役にも立たないと思われていますが、そのことで初めて現世的な効用を持ち得るわけです。

まだ読んでいない本だけではありません。一度読んじゃった本を捨ててしまわないで、あるいは人にあげてしまわないで、とっておいて、もう一度読んでみてください。同じ本を二度、三度繰り返して読むこと、これもまた大変な効果があります。べつに新たな発見を当て込むわけではありません。一度読んだ本を二度目に読むと、前とは違う角度からものが見えて、違う角度のものを発見するということは十分あり得ますが、そんなものを当て込んで二度読みしてもしょうがない。そうではなくて、分かっている、もう分かりきっちゃっていることを再確認する意味で読んでみる。これは面白いですよ。もう分かっていますから、あつ、ここで主人公は死ぬぞと思うと、やはり死にますから、そういうわけで、大変面白いといえは面白いんですね。

どうしてそんなことが面白いのかというのは、諸君自身が、スポーツ新聞をお読みになるでしょう。スポーツ新聞を朝開きますと、きのう巨人が勝ったか負けたかというふうなことが大きく載っております。ところが、きのう巨人が勝ったとか負けたとかいうことは、だいたい前夜のうちにテレビニュースでみんな知っているわけですよ。もう分かりきっているのなら、なににも読むことはないじゃないかと思いますが、それをまたスポーツ新聞で読んで、もし巨人ファンであれば、ああ巨人が勝った勝った、といって喜ぶわけですね。その喜びを再確認している。朝の通勤電車に乗ってごらん下さい。ほとんどの人がそういうふうにして、きのうの試合の結果を報じるスポーツ新聞を読んでいます。分かりきっていても読む。実際に、巨人が勝つとスポーツ新聞の売れ行きが上がるというんですからね。つまり、大勢の人が買うわけです。バカバカしいといえはバカバカしい。たかがプロ野球じゃないか、たかが巨人軍じゃないか、と思いますけれども、その人にとっては楽しいから買うのでしょう。50円か100円のお金を払ってでも、その楽しみを手に入れたほうが面白いと思うから買うのでしょう。

似たようなことが、よく売られている有名な落語家の落語のテープ、あるいは最近だとCDがありますね。あれをかけますと、例えば、古今亭志ん生の「火焰太鼓」なんていうよく知っている噺を何度でも聞くことになりますが、何度聞いても面白いんですよ。同じところで笑うんですね、不思議なことに。もう分かりきっているという人は誰もいません。むしろ、それが志ん生なら志ん生の芸なんですね。

あるいは、歌舞伎役者の芸もそうです。舞台の筋を知らない人が見にいつているわけではありません。よく知っている人が見にいつて、そして「成駒屋！」とか何とか叫んでいる。十分わかっていることだけど、それがある基準に従って美しく演じてくれると、見ている側は楽しいということがあります。

つまり、情報をとるという見地だけを考えれば、一度読んだ本はもういらぬはずですが、そうではなくて、情報伝達のエンコードとデコードのところにまつわるいろいろなものを、そこで味わいかえす。受けとめかえす。ということに着目いたしますと、同じ本を何度読んでも楽しいということになります。

夢と現実の間で — 詩の暗誦から —

ここまでくれば、本当はここからがしゃべりたいんですが、「詩」まであと一步になります。「詩」というのは、言葉でつくられる芸術でありますから、単なる情報伝達ではなくて、その言葉の受け渡しのなかに、どれだけの美的価値なり何なりが潜むかということの勝負でありますので、一種の連想ゲームを楽しむみたいなものだと思っていただければいいのですが。

これがうんとオタク的に入れ込みますと、詩を暗誦する。読者が、まるで自分が作者にでもなったかのように、その詩を隅々まで覚え込んでしまつて、いつでも取り出せるという形でデータベース化しちゃう、というふうなことも起こります。本当は、詩は、こうやって作者には内緒で読者が暗誦して楽しむものだろうと思います。ただ、暗誦といったって、隅々まで完全に言葉を復元することはできないかもしれませんから、信頼でき

るテキストをそばに置いて、ときどきそれで確認しながら、その詩の楽しみを味わい返すということになるでしょう。こんなふうにして私たちは詩を読みます。

一冊の本を読み終えたり、あるいは途中でやめることもあり得ますが、そうしますと私たちは、そこでフッと自分の置かれている現実に戻ります。自分がいま本を読んでいる貧しい机の上に戻ってきます。本を読み終えたり、あるいは途中でやめたりして、現実に戻るときの楽しさというのも、ぜひ君たちに味わってほしいですね。まるで夢からさめたような気がするはずです。今まで自分は、ほんの1時間か2時間ではあるが、ある夢を見ていた。そこから現実に戻ってきた。夢から現実に戻るというときには、何というか、ある特殊な感覚があるのではないのでしょうか。夢がそこで切れてしまって、残念だという気持ちと、ああやはり現実に戻れてよかったという安心感と、そういうふうなものを、本を読み終えるたびに私たちは味わうことができます。しかし、戻ってきたときの自分はそれ以前の自分と、どこかほんの少し、違ったものになっているような気がします。

と同時に、それは自分が、たった今まで、どれほど現実から遠く離れたところへ行っていたかということさをさぐる、悟ることもできます。こうやって、現実と現実でない世界との間を行ったり来たりする。それを積み重ねますと、やがて我々は、自分の貧しい机と、その前に座っている惨めな自分という現実を乗り越えることができるようになります。乗り越える力が得られます。これは本を読むことによつてのみ得られることで、どうやら映画や漫画をたくさん読んでも駄目なようであります。これも私の乏しい経験から申しますと、やはり文字で書かれた本をたくさん読むということですね。それからでしか得られないようなものだと思います。

本を読む前と読んだ後の自分自身を比較する

結局、「本を読む人」と「読まない人」は、それは、読む人のほうが読まない人より偉いというふうな、A君とB君の比較をするために言うものではありません。そうではなくて、同じA君が、読む前と読んだ後とで、ど

のくらい変わっているかという、同じA君の、読む前と読んだ後の比較をすること。ですから、本というのは、他人と競争するために読むのではなくて、自分自身と競争する、あるいは自分自身を乗り越える、そういうために読むのではあるまいか。と私は思っています。

もう時間もきてしまいましたけれども、お話の冒頭で言いましたように、私もそんなにたくさん本を読んだ人間ではありませんので、まだ読んでない本、これから読むのを楽しみにしている本が結構たくさんあります。私も、もうじき大学は定年になりますので、定年になったら、日ごろ読めないあのでかい本を読んてみたいなどと思って、実はひそかに買い込んである本がたくさんあります。研究費で買ったりしております。本当はいけないのでしょうかね。研究費で買った本というのは、大学の在職中にそれを読んで、その成果を学生諸君に還元しなければいけない。退職後に読もうなんていうのはけしからん話ですけれども、まあ、そんなこともさせていただいております。私自身が、年をとってもそうですから、若い人たちにはもっと可能性が大きいんだ。そんなふうに思っただけがあればありがたいと思います。

下手なお話はこのぐらいにしたいと思います。どうも失礼しました。

(拍手)